



中村俊定文庫
文庫 18
764



陽定藏

おし陸北酒造家蔵十書
老若若春の字よりそ北の離後
三つともは知るる深田家の子
比留の志と全書と他邦子傳
深田酒子と梅子と名古
任丹流傳の道人江府在勤
川右一筆の流傳の書の中
略の直傳のよき書と云々

此酒の心は也離丹流傳の
梅子と梅子と名古の
深田家の子と梅子と名古
比留の志と全書と他邦子傳
深田酒子と梅子と名古

此酒の心は也離丹流傳の
梅子と梅子と名古の
深田家の子と梅子と名古
比留の志と全書と他邦子傳
深田酒子と梅子と名古

Handwritten text in a cursive script, likely a letter or document. The text is written in a fluid, connected style across approximately 12 lines.

Handwritten text in a cursive script, continuing from the previous page. The text is written in a fluid, connected style across approximately 12 lines.

三
我々も此の如く思ふ所ありしに
此の如く思ふ所ありしに
此の如く思ふ所ありしに
此の如く思ふ所ありしに
此の如く思ふ所ありしに
此の如く思ふ所ありしに
此の如く思ふ所ありしに
此の如く思ふ所ありしに
此の如く思ふ所ありしに
此の如く思ふ所ありしに

此の如く思ふ所ありしに
此の如く思ふ所ありしに
此の如く思ふ所ありしに
此の如く思ふ所ありしに
此の如く思ふ所ありしに
此の如く思ふ所ありしに
此の如く思ふ所ありしに
此の如く思ふ所ありしに
此の如く思ふ所ありしに
此の如く思ふ所ありしに

光緒八年九月朔





萩と見よけやまけよの吐く 嵐外
 月の支度れ有と 若人
 蛭のあとまうくつのはら 外
 川とけろろし 藤かしら 人
 餘おれうーろくも 可也 外
 唐塚の又きれろ 入梅時 人



宗良此池田の外子小之
志ん坊ま子接妙とす
戸のあゝ復花なつま住
酒の通ひのせうありし
歳ふも戻てえら君の
眠てちうこい相言のきぬ
月みけよ是く吉平とよま
秋ふき初々 藪乃厄外
外人外人外人外人

五

玲板の口ねる兒等城長あ
麻疹の床の病ふり子
花れ陰顔より番子あり
あき前く代の日候つけお
残言をかりれ小橋よ揚ち
より火つて困休乃水汲
堂まの古き世根とがき
六ろりいぬげ馬の蓮の形
外人、外人、外人

浮くある窓れあゝの巻を
 冬心の夜の代まりす
 ける鼻き魚の白ひのみらて
 りみ一門の花の咲こえ
 指へ下柳の世話れ一里塚
 ほくく衣くまは海苔のつく
 炉と塞くあとをりし月影
 親らむまこくくろぬ山伏
 外 外 外 外 外 外

尻かろふたも糸まのくさまり
 提くくくくろ甲うけの紐
 きぬく、溜鞆まがけ時りれや
 恨のす束のそれぬ喘息
 るれ毛とむく同の窮屋さ
 使くやまハ町城出ぬけら
 外 外 外 外 外 外

今何ふくくわい丁の表きふ 若人
 退屈亭の表る 月代 松
 秋風を左右のまきみ次らて 人
 まね、問う人まらうらうら 乙
 船くれ一仕りある屋根の表れ 人
 藪花越て免相さく人れ 乙

世中いひきつりて長坊を先
師をの圍の情猿は
踏つてと蜜柑の床の冷あり
細砂と出く風のかきこむ
川尻の普請越えては
柳のまきこむ馬の蹄を
宵の月本履なつたれ湯あり
通草の下の草かけこむ

正阿 人 人 人 人 人

魂糸負るうらみせくは
いりら 鹿の酒子酔ふる
釣末れ人のまぬのハ花子祇
吹すさ海かきこむ葉の夜
空倉れ始終子よこし丸中
次もや詩く杖茶や作
伯父の氣さしぬ百とく
新はしきしる板の植ふけ

阿 人 阿 人 阿 人 阿 人

夢ぬうちかき虫の裏より
木刀休むるよ乃夕ぐれ
頼るれとねえくちあつ古き
あゝぬ男紙も乃し義理を
かゝけ繁み埒のあひるじりき
漢所の月よまほしくり
啼百舌鳥れ風むらゝき
波岸月よまほしくり

人 舟 又 舟 人 竹 舟 阿 人

神まにまゝに寝る宿れ木戸
醫者れまゝよ面削り出る
雨くれハ雨くもよ鐘の声
聖白の口雁よ茶盤どけり
草の香よまゝ肩衣れ打寄る
くまゝにまゝにまゝにまゝ

人 舟 人 舟 人 舟 人

秋風角行送れつく畠うね 万俗
 鹿の起居のむらうけなき 兎洞
 榎のい月ぬくぬいささく 若人
 こゝろつらこゝろむ新故の挽 墜之
 古もやう雨乃袂城くまき 草龍
 ねんらの外く節氣忘る 田年

すくじ念佛すくじに花仕茶 其齡
 経亦山乃夏もさゆゆく 不外
 授子、誰か極てはしきいさき 阿上
 妹、苗字とせしむるあくや 每涯
 一言もさしひくす人の顔おれ 洞人
 壁土のきれぬの瓶なる之 人之
 蛇子講部森の家、月ぬす
 小糠掃くまほしめしゆく

刺そは天窓さきくたぬみ 年
 おくりにくまゝ犬の律義さ 龍
 遅様花の流のてあはゆき 外
 干鯨の塩のしころ四五日 齡
 霜消る溝の石垣崩へし 涯
 布衣の巾着の尻ぬきさる 上
 いまの介繁頭のまゆりさき 俗
 雙六のよれうつよまゝ人面 洞

けしきしなまはらま世帯人
須磨れやうすとすまこしく
やまもあぬまはらまの眉の舊よれ
今朝のころも縁張の弓
ろくろくし料理の下出せり
何れりくてもまもふ朋輩
寐而月れりましく日記する
打て捨る雞既乃丈

人 之 龍 年 齡 外 上 涯

地 流の行かきならる吾れ内
礼え子其くさく眼く空
白傍さ子三百も回一歳歳も
棧の着物の出来ありり
茶植く圃の儀さくやまれ
以千とくく泥の行送

洞 儀 之 人 年 龍

垣あきて月三時の十二夜 素磔
 一搦す、籥のとり入き 若人
 秋風を伝ふ涼なき 鶯の声 磔
 直れらるるかゝよの忘れさる 人
 引よる松影なる 籥の鳴 磔
 名の時月れ 今羽着連る 人

川の流るゝ鉦鼓の音れきく之
たぐも直々ぬ宵れひき戸
寐て見ゆる大板あま目と見え
馬子喰する朝長う蓑
衣るる蜂退のけう葉れ陰
残りあつさぞ今朝も同くし
此以の月城志馬に召せ床
をふくくそ花の響く外あ
人 磔 人 磔 人 磔 人 磔

澄ま東堤と走せし重
七の鐘のこき葉内
花のほ隣をかりる葉下
下戸ものさぬ桃乃並
喜れ雨田乃斤隅のけうく
鳥のまたよ的矢射うけ
汗かしく又笑をあき坊
葉も多もまきうぬ世中
人 磔 人 磔 人 磔 人 磔

分おの十里のれ送をこ
情もさねぬ顔つきのさ
あ子僧も切く仕露年批答
寒くくこあまよるさぬ
聲もくく傍ひ合する松の凡
りも苦れさき秋の青天
新月の一束光る今も兼
ささす 枝子 池のひし倉
人 磔 人 磔 人 磔 人 磔

引越の簾子人のきくら並ん
も挽袋わらも古里の突
なりあき系れ抱の出まん
花子新ひ坂かける 芥子焼
戸障子も寝んこあこるまは子
雨うたやくく 正月日海
人 磔 人 磔 人 磔

うしろ向ふ大海のぬきと和んのか子思ひ深めしそ
くさるれい及を引くけ履腫巾とやまひいこんよ
こそ一珠あくれきと淋きとさうさうあつるあきれハ
うまきとくくといひさる國をしさうまきとあつるあきれ
こまの食いしこまきよ小神人けあされし山首
の首袴まもるもさうかゆりてし中しとぬれや神
くまらとくくもさうさうす茲子磯子とくくもあつる
り奥のくれ様おとく日向の聲女出雲の神子
三條のふり神賣播すの鴉うりて旅蔭傳りて
伊勢もつるも然歎のくまらとくくあつる濱の枝とくくし
神登

一重此國をきく流く一向子けかしも社人すまかし乃
こころとせ助さす雨の河一と暮の夕せ量百よれあを
淋いささせぬよとく主勝さあくれは枕一よりか
ふまも捨ひ下詮操くらとかつくも枕の意執を
しむる外あはれは海くそ舟の時のおくは田
たうしる若人の筆記を古子揚る

旅次し月夜も一抱つ 太節
月うり枕をせしと初淋山 雄尾

后啼 やまこあまあは秋の書 瓢風
あまくと 蝉啼秋の梅京り 官鯉
晴たろしちき河名雄子れ二更 公李
記又せし羅の亥等の鳴子安 鹿太
河もる 晴くしりや困古也 方居
人の 斬守て年する夜室小 一草

場午乃日

五月雨清香の浪よ子の日せし 魯隱

九月尽の日

り鳥あよ一羽そ秋ねしき

琴州

葉山子〜〜人のあゝる山家

妻妓

郭一公音あふは秋〜〜

對竹

水巻く抱んで寝る小田代

鳥頂

汐風や〜〜喜れ山吹

春水

苔もなく暖き出く蝸牛

釣翁

ね〜〜目も花らもや家本香

草丸

お乃も〜〜更て晴ぬ男廉

丘高

喜風や鶉啼里よりつま

弯田

霜風や田に〜〜望る妻は

太民

東乃窟く燦々の〜〜さき

尺艾

湯尾山の榊

ほ〜〜きん罪ほろほり

百非

侘〜〜ら菊也て出るも

巢兆

秋〜〜や雪ひよもれ首す

寒葦

萩 根乃ちりや 朝夢の 藤垣子 月 鴻
如 中の 人間あゝ 種乃凡 岳 輅
十六 萩や 目ふくく 古 衾 亜 然

睡月ありし
ほろけり

梅 の さき 世は 出い 福の 神 恒 九
山 里 や 入く 光本 けうめ の 花 桐 栖
四 体 の 中よ 水より 流り 如 陵
教さ しく 出み けい 芥子 花 松 乙

十六 萩や 魚うい びる 蕙の 皮 一 左
若 菜の 月の 明く 成よ 光 雨 節
根よ てるの 月と 膝より あり 喜 年
鉦 僧も なる あく けり 否 考
元 山や 萩も ぬの 田ち 方 明
長 上萩の ちか 中よ なる 黄菊 末 紀
なま きの くる ちか 入り 萩の 花 雀 鳴

世義寺よ
あゝ

照る月よたへくちる様小 樗堂

五月也や寺れ焼きゆる藪(北尼

くひもやたへくちる上すき 素迪

六月也鼻つき合あかいら 一作

啼るの上もたなくそまはる 井眉

室けいへてあつて十ある 鞍風

いふれはる後よ侍とあはれ上休まの
あまらそこのさへ

祇る室き一齋務も耳のくる 泉阿

短歌や小魚のめくる桶の中 古周

春日山古塚

風乃く山本道六のいもろめれ花 甘雨

まよてもくかりあそちる様 玄蛙

骨の関

埋火よの我を祢老の口 風阿

目のもれはく薄の夏の月 如綏

そまきくぬ氷も骨ある田長川 國村

月くげも大らぬもそ冬れ雨 完有

爺く婆く、波卷も
すき

春馬よつゝ楽する在取り 左琴

花日和しれな〜た〜り〜 長翠

山水れ藍うらた〜く〜 月居

山里や松も通さし葉成海に 一蕙

足利学校

春風の外は風何の字も 松 夢太

茶やの茶れ白いほ〜ん〜 園亭

魚市乃とく小淋 末祿菊 厚丸

末枯や牛根姓の海つらみら 護物

草れ花り焼の火れ無合〜 儲史

教き〜く〜 漫く

近江のそ

音飯抄子りや湖水の時も 竹斎

〜れ〜く〜 又思る魯れ伊吹山 亞碩

芭蕉の妻なるる嵐の如 文角
室の菊の咲くさくやも仙花 曰人

芭蕉の果敢めくくはよふはなれりしもの
あはれとあはれまふしおかし

涼—さうそいそいぬ秋ハ 有斐

人ハまことさくしや草のり堂 阜池

初厚く風呂焚賤く小あぶ 松夫

白鳥や志回し姪刺る人々 燕市

角力元まきくくくはよ萩の中 推己

六月乃さく

暮くくくく秋の宵くや二日の月 一之

小老実人ハ厚くちいさく 成美

都も賀茂川をて東家ハ 雪雄

見よりのいもれ出さる浮葉ハ 梅間

又月雨や燕乃す海を窓の穴 舌鳥

山里の水くくくくはくくく 子厚

雀の身くくくく月れたる也 雄途

舟なほよの百くちつて野ふけ 心非
そのよきて常まつ月や菊の上 久臈
芥子ほよも捨るもの 春の山 旧人

小督もや きわよん

菘も何く冬 枯川小けいり 木海
盆乃月走うまうま 泣上戸 雲帯
夕立や冷うつらき 暮乃月 米彦
順礼の著 暮き 暮の暮 月巢

つらびく 暮もひなき 木槿小 春人
稻妻はうけくく 蝉の声 桂五
家毎く 蚊やうけの 榎小 奇淵
野乃 幅子 瑞る 冬瓜や 後の月 三巴
黄んや 折ひ 冬よの 俄り 葛三
西念の 隠れ 春の 妻れ 雨 三津人
り 燈の 燿うけ 秋奉
吹おろし 鹿の 声 関史

昔と定と赤きまやとえ井とくますしきぬ人の
おほはくしやとやおほまうしきしきとあつる香の
名子よるがれしけり川の川の水除き事しきとあ
わしきもやあハ又口おきりやとすや

ひしししはむしんさうしと若の毒 南江
歯のぬけく笛いふまぬ木城芥 士明
萍まきく早蕨ころいしや 如毛
青芦の雨あまひや宛上川 芳之
燐風や犬吼く野子うけ号 草人
大坂を以ててしきりこ子 空阿

あましとても毒しとくれの嵐山 竹有
箱さびや成る香室の本れら水 石池
鹿乃道今年もさき月お小 木雞
山回や競子捨る笠乃長 士朗
湖の涼あう所ほと 夕立を免 干當
りしの中さく卯月の曇りか 五陵
湖や二菰はりぬ鴨の声 茂良

あまら幸子かひり侍りし時苑麻子の温泉子
湯あしきりしと

言れぬふ似く雀鳴さくは 夫木
くし響のよふえつくやとまれ山 湖雲

樂庵の清史一うらたけの溝川
とちまぬらうとくしりつきぬく

早稲の香よ鼻つきさる月見は 物成
摺子やけつくえはる長月の影 雄淵
鴨立ち月ゆくともうさく 一會
連翹の邪なきもむねまは雨 仙市
ちちらりー水田よりはる松のうけ 蒼虬

馬買れ志よ成顔子草ぬきふ 胡準
餅茶の赤い種よつく蛙鈴水 柳莊
膝かゝら日南よむけさひう之水 まゐ
啼止まりよらん描の目つき 太夫

鹽屋の月よあまき
あまき

石の声六七尺の雲井うら 椿堂
子規萩歴ハ川上川向ひ 厚九
ちちらりー志する人の神さ木 南窓

六あくと日ハ管ふる角田川 亀宗

五月雨や毎日少く芭蕉の系 外六

鹿乃声雨にほほあはし 九秋

りまを寐く柳にふる草花 岫友

白菊や雨のかすひもあま白 天朗

きん安き松明とかりり芭蕉 朶年

初くれ楓子なうさあはまきれ 斗筭

祐成時致うさうさ
又やれ

田の中や田極の魚の一を唐七堂

雲よはさせる白鳥の山の坊乙二

涼しき木れ枝おろと隣り 玉峨

うさひ子う系

雲の厂雀のあはらう歩り免 素禎

ほひふらさうぬさやまれ系 吾七

のくやのりやすなれま雲こ 雨蘭

りまや佛の花の志ゆくし 吐丸

長岡白王居

多近く梅のくぼき日向くを 長存
かゝくとも舟よ寄る 言見ハ 希言

堀井寺のほくとてりま

常遅よ日乃今とねく紅の家 可盛
西吹や赤菊くらの山の家 東雲
家二朝あゆくと里より秋の音 騏道
静さや 蠅よ寄る 油筒 蘿堂

夏れあや風よあまの松の月 鹿野
仔の月あらの門もゆくとわす 蕉雨
菊の香や直のすくと秋の声 壺伯

一日君念り

柳やう様やうくくいなとさきい 素園
大才れあつはりく鹿の声 微席
羨しき底の貝へく夏乃月 篤老

湖上乃致景一書よ
夏乃月

かきかひの白や松葉
巻風や伊吹のて起さる
よのすきすのてあり松が
石毛 蛇園 松兄

横吹城跡

今やさかたき成る香
朝ふれをよみよ嘆き
余はの春をたのしみ吹枕
花はまの草かきけ三笠山
阿彦 巢居 巴園 桃蹊

炭のふりきりく首の
舟島の隅くゆり葉の花
表丁 くら

山の世の古根や古き根の
伊吹の城跡

元より春はけりけり杜若
鴨川城越る水あけ人猫の
梅さくや朝くふる鳥の声
鍋一りつる一葉の穂花の内
ほろくと秋さきく後鳥山
蝸守 省我 雀老 不外 諫圃

業人や蝶もなほして斬く
鶯月を羽くく雨をうたぐ
町中一二羽あまて啼き
魚心

秋よよ来詠の途中

きのり雨を思ふや秋の山
おきの啼きもなほつら
よき朝や松の雀もま田時
さしつゝさるる子あつるま
左詔
呉来
晋菽
文北

さ浪の多きあふまほり
葩英城まほりふの塵ほろ
かと明くまてたきい月日
白圖
素江
一瓢

古洞乃井と見くや

春雨の晴るく向く居の尻
古里八向の書もまほり
川下や物何濁のぬりも
帰くお笑やこ詠の民も
挺村
蓬仙
鷹汀
謎

百姓の長子かゝる厚儀る 都英
好乃月訓一芒いふよ朱 萬外

朝の露ももぢき
あつら

子鳥くけよらふらうと曲川 冬化
虫の音はくまきせくまの音は 氷靴
朝露や眼白も少くお併好き 至長
橙子も一際せせく初雨 竹里

友の里

るはまの秋の声すく雀くる 千丈
穂を

畠あまま詠くそま詠り了 阿上
ふらふらや雀の糞のふらくし 隆之

曾ら旧室七句

相一葉店の秋のまよき 兔洞
お鳥やふらふら 犬の魚 芸門

朝日の良踏しめり草履小 八朵
 鬼灯の花見分りて席れ草 無涯
 箒木の園よりすくさ花屋 恒見
 初まらやほも残しぬ苦れ庭 其齡
 紫れ火のうけりぬ世ぬ日紫 菩雪

湖邊

鴨ひこと啼ては都ぬ日たよ 田年
 きこしむもや田螺の鈴鐘の鳴 著明

諏方末社

門口の心後りまきや草枕 正阿
 天滴のりよて

見ゆていふぬ月されやりの月 草龍
 心射山よて

藤の跡より月のすまや花畑を芒 千辻
 天龍川

夏れぬや尾よき居ての川 青以

寛永

ほの月島のとほのふらふらと 呂利

花と地と月夜もあふふらふら 魚洋

淡阿山とふらふら

うらむすの光と煙と淡阿山 万成

淡阿山のふらふら

空けし山を隈すやまの事 素磔

